

平成二十年度読書感想文コンクール作品集

もろく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

目次

講評・その他

入選 第一位	『夢をかなえるゾウ』を読んで	一般科目	国語科教員相本正吾	……	2
入選 第二位	『私の頭の中の消しゴム』を読んで	電気電子工学科	一年 谷岡 祥	……	3
入選 第三位	『カラフル』を読んで	制御情報工学科	一年 秋吉 優子	……	3
佳作	『一瞬の風になれ』を読んで	都市システム工学科	一年 大谷 勇太	……	4
〃	『L c h a n g e t h e W o r l d』を読んで	機 械 工 学 科	一年 山 田 師 巨	……	5
〃	『村田エフエンディ滞土録』を読んで	電気電子工学科	一年 柴 田 真 衣	……	5
〃	『ありがとう！山のガイド犬・平治』を読んで	制御情報工学科	一年 浅 野 早 紀	……	6
〃	『夢をかなえるゾウ』を読んで	制御情報工学科	一年 宮 近 沙 希	……	7
〃	『夏の庭』を読んで	電気電子工学科	三年 吉 山 和 志	……	7
〃	『ベルナのしっぽ』を読んで	制御情報工学科	三年 河 野 史 織	……	8
		都市システム工学科	三年 古 木 亜 弥 実	……	9

編集後記

学生図書委員長
 (制御情報工学科 五年)
 鈴木 克也

講評・その他

一般科目 国語科教員

相本 正吾

本年度は、担当国語科教員により各クラスから選ばれた優秀作(計二十二作)を対象にして、教員図書委員及び学生図書委員による第一次・第二次審査、国語科教員による厳正なる第三次審査を経て、「入選作」として三作(第一位、第三位)、「佳作」として七作が選出されました。

見事第一位の栄冠に輝いた谷岡君の『夢をかなえるゾウ』を読んだ」は、ゾウの神様「ガネーシャ」が与えていった「課題」により自分の夢をかなえることができた会社員の物語を通して、夢をかなえていくためには、夢の実現に向けて日々少しずつでも努力していくと共に、自分のことだけを考えるのではなく他の人たちの喜びせようと一生懸命努力していくことが大切であることを読み取っています。読書によって大事なことを得た感想文になっています。第二位の秋吉さんの『私の頭の中の消しゴム』を読んだ」は、肉体よりも精神の方が先に壊れてしまう病に突如襲われてしまった主婦の苦悩とそれを身近に支えたその夫の物語を読んで、

人は周りの人に支えられてこそ生きていけるのだということを読み取っています。支えられる側だけでなく、支える方の側も、その支え合いを通して大事なことを気付かされ新しい発見もあったに違いないという理解には秋吉さんの深い洞察がうかがわれました。

第三位の大谷君の『カラフル』を読んだ」は、死んでしまった主人公がもう一度生まれ変わるために少年の体(じつは自殺した自分)を借りて人間界で修行をするという物語を読み、その修行を通して主人公は自分を見つめ直しただけでなく、それまで見えてなかった周りの人たちの良い面まで気付くことになったという人の心の移り変わりに注目しています。主人公が人間界に帰る際のガイド役の天使プラプラの心の内や態度のことまで大谷君は細かく読み取っていることには感心しました。

佳作となった七つの感想文も、内容や表現において入選作に勝るとも劣らない力作が揃いました。高校の陸上部の部活の様子を述べた小説を読み自分の部活への取り組みにおいて大事なことを学んだ山田君の作品、失敗した人の立ち直りや世界変革のことを強く訴えた柴田さんの作品、その時代を生きていく「時代の生」のことを深く考察した浅野さんの作品、皆に感謝された山のガイド犬「平治」のことを語って心温まる佳品となっている宮近さんの作品、自分の可能性をあきらめないことの大事さを述べた吉山君の作品、人の死を観察し体験していく主人

公たちの行動を通して私たちの生のあり方や生の尊さのことを考えた河野君の作品、主人公とその盲導犬との心の絆とお互いの支え合いへの感銘を語った古木さんの作品、いずれの感想文も、作品に対する細やかな理解と感受性において見るべきものがあり、読む私たち側にいろいろと大事なことを考えさせる感想文となっています。

読書の価値は、その面白いストーリーや内容を讀んで気軽に楽しむということと共に、その本に書かれている情報や考えや物の見方を読者側が自己の内に有意義に取り入れていくことにあります。後者においては、その本の内容については時に懐疑的・批判的に捉えていく姿勢を持つことが大切です。校内読書感想文コンクールへ向けて今回提出された読書感想文の内容の傾向としてその本に表れた考えや物の見方をそのまま称え、受け入れている感想文も多く見られました。書物及び書物の内容に対して取捨選択を行い吟味し批判的に見ていく態度は、私たちが正しい情報と真に価値ある考え方や姿勢を獲得していくために欠かせない大事なものでしょう。

来年度の校内読書感想文コンクールに向けて目標や志のある学生は、日頃から広い読書と作文の研鑽に励んで、入選を目指して下さい。

入選 第一位

『夢をかなえるゾウ』を読んで

電気電子工学科 一年

谷岡 祥

この物語は、どこにでもいる普通の社員が、ゾウの神様「ガネーシャ」と出会い、自分を変えるためにガネーシャから出される「課題」を実行していく物語です。

ガネーシャが出す課題は、「そんな事やって意味あんの」とか、「本当にそれで変われるの?」と思うものばかりです。例えば、「靴をみがく」や、「募金をする」等です。実際僕も、こんな事して意味があるんだろうかと思いましたが。さらにガネーシャは、神様のくせに生活態度がものすごく悪いです。ずっと家でゴロゴロして、遊んでばかり。ご飯も腹十二分まで食べるし、おまけに非常識。読んでいる時も、「こんな神様いるわけないじゃん」と何度も思いました。しかし、こんなガネーシャでも、たまに「ああそうだなあ」と思わせることを言います。だから、社員も最後まで、ガネーシャの課題を毎日真剣に実行したのだと思います。ある日、ガネーシャは社員に、「このままではお前は変わらない」と言いました。この言葉に僕は驚きました。それでは今までやってきた課題はまったく意味のないものになってしま

うからです。さらに、「人を喜ばせる」という最後の課題を与え、社員の前から消えました。その後、社員は努力し続けて、自分の夢をかなえることができました。

僕は、ガネーシャの与えた課題は、自分を変えるためのものではないと思います。ガネーシャの課題の本当の意味は、自分の夢をかなえるには日々、少しずつでも努力しそれを続けることが大事だという事を教えるための課題だったのではないかと思います。そして最後の「人を喜ばせる」という課題。これは、自分の事だけを考えている人は幸せにはなれない。本当の幸せを手に入れるためには、他の人達を喜ばせようと、一生懸命に努力することが大切だという事を教えるものだったのだと思います。その事に気付いたから、社員は夢をかなえることができたのだと思います。僕も、少しずつでも努力をしようと思えました。夢をかなえるために。

入選 第二位

『私の頭の中の消しゴム』を読んで

制御情報工学科 一年

秋吉 優子

今まで普通にできていたことができなくな

る、たくさん思い出も大切な人のこともすべて忘れてしまう、そんな体験をしたことがない私は、この作品に触れ、迫り来る「精神の死」に立ち向かう「薫」や一番身近で薫を支えた夫の「浩介」から人として生きていく上で大切なことを多く学んだ。

仕事も家庭もまだこれからという二十九歳の薫を襲った若年性アルツハイマーという病気は、肉体より精神の方が先に壊れてしまうため、大切なことを忘れてしまうことを恐れれた薫は徐々に焦りを感じるようになっていく。仕事で周りに迷惑をかけたくないという気持ちは多くの人が持っているだろう。薫もその一人だった。それでも、入社以来、彼女を支えていた理解ある二人の同僚には、もっと早い段階で病気のことを打ち明けても良かったのではないかと思う。それが薫にも仲間にとっても早く病気と向き合うきっかけになっただろう。仕事だけでなく、夫や両親にもしばらく病気のことを打ち明けなかっただけに、一人で苦悩する薫はとても痛々しかった。

しかし、悩んでいる薫に病気のことを理解した人々は彼女を遠ざけることなく、最後まで向き合ってくれた。薫の主治医は、「あなたもいつかはこうなる。」と交通事故で若くに植物状態になった夫の話をし、厳しい現実を突きつけながらも自分が夫と過ごした短い時間がどんなに幸せだったかということを教え、「自分で何かを選んだり、決断したりする時間には限りがない

ある、自分のためにやりたいことをやれば良い。」と励ましてくれたことが薫の力になった。また、薫の夫である浩介も、「自分がいればあなたの重荷になる。」と言う妻に「僕が君の記憶になる。」と強く言った。その時の薫は再び絶望を希望に変え、夫のために強く生きていくと決意した。

大きな困難に出会った時、それをしっかり受け入れ、冷静に「今、何をすべきか」を考えることがいかに大事でどれだけ『今』をより良く生きていく手助けになるかということはこの作品を通して理解した。そして、人は周りの人々に支えられてこそ生きていけるのだと改めて感じた。薫を支える浩介、親友、両親、会社の仲間達、それぞれの考え方は違うけれど、みんなが薫を支え、また逆に、薫によって、周りの人々が気付かされたこと、新しい発見もたくさんあったと思う。「頭の中の消しゴム」と闘うには、傷つけない、迷惑をかけたくない、「大切な人達」が必要なのである。



入選 第三位

『カラフル』を読んで

都市システム工学科 一年

大谷 勇太

人はそれぞれ色々な心の色を持ち、鮮やかな美しい色もあれば、濁ったどんよりとした色もあることに気付かせてくれました。

私が読んだのは「カラフル」という本です。この本のあらすじは、死んだはずの「ぼく」の魂が、もう一度生まれ変わるために人間界で修行をさせられることになり、プラプラという天使のガイドのもと、「ぼく」は自殺した「小林真」という少年の体を借り「小林真」として暮らし始め、周りのさまざまな人たちと関わり人の美点と欠点に気付いていくことで、「ぼく」の前世は自殺した「小林真」だということを知らずというような物語です。

この本でも重要な点は、「ぼく」の魂には最初は記憶がなく、他人の体のつもりで人生を再体験することだと思えます。なぜなら何も知らない自然な状態で「ぼく」は「小林真」という人物を見つめ直すことができ、不安定だった家族との関係やあまり交流のなかったクラスメイトとの関係が変化することができたからです。例えば「真」は父のことを利己的な人間と考えていましたが、「ぼく」は父と話すうち

に実はとても良い人だということを悟りました。又、兄のことも意地悪なだけの性格だと考えていましたが、自殺後、兄が医者を目指そうと進路を変えたことを知り、「ぼく」は優しさの面にも少しずつ気付いていきました。

このことから、人は良い面、悪い面などの様々な面を持ち、それは人がそれぞれ違った「色」を持っていくようなのだと思いました。

次に私が一番印象に残った場面は、プラプラと別れる場面で、なかなかプラプラの言う通りに人間界に帰ろうとしない「ぼく」に対し荒々しい口調になるところです。その中の「荒っぽい口ぶりのわりに、瑠璃色の瞳は少し、ほんの少しだけ切なさそうにかげっていて」という文が印象的でした。

プラプラも本当は悲しい気持ちがあったでしょうし、荒い口調になったのは「ぼく」のためだとしても辛かっただろうなと思いました。又、最後にプラプラが言った「小林真。しぶとく生きる。」という台詞にはプラプラの気持ちがとてもこめられている気がします。

人の持つ様々な心の色・味・明暗に気付くことで、きっと自分が考えていた世界が全く違う世界に見えるのだろうとこの本を通して思いました。

佳作

『一瞬の風になれ』を読んで

機械工学科 一年

山田 師 巨

「何読みよんの？」

仲のいい友達に聞きました。

「一瞬の風になれっていう本かなりおもしろいよ、読んでん」

僕は、その友達に一卷目を借りて読んでみました。最初は、「うわっ、ぶ厚い本やあ」と思いました。

僕は、本を読むより、外で遊ぶほうが好きです。だから、この本も今年初の長編小説でした。

しかし、一ページ読むと次のページ、そしてまた次のページと友達が言っていた様にとてもおもしろく、1日で読んでしまいました。

そして、二巻目、三巻目と一日一冊のペースで読み、気づくと三日で読んでいました。

この物語は陸上部の話です。僕は、陸上というと、走ってタイムを縮めたり、槍や、鉄球を投げて、飛距離を出すだけかと思っていました。

しかしこの本には、練習での出来事や、試合前の緊張などがたくさん書いてありました。

僕は、一つ一つの文字を追っていくごとに「あー僕も、こう思いよったなあ」とか「それ

は、違うやろ」など、中学校で部活をしていた時のことを、思い出させてくれました。

試合前の独特な緊張感や、勝ったときや負けたときの喜びや、さげばたくなるぐらいの悔しさなどを鮮明に思い出しました。

でも、それ以上に、練習風景をよく思い出しました。部員とのすれ違いや、なかなかうまくいかない技など、自分が陸上をしているかのように伝わってきました。

僕はこの本に出会って、大きく変わったと思います。自分がめざすものをハッキリ決めて、それに向かって努力してゆけば必ず近づけるということや、友達の良い所をみつけ、それをお互いに尊重し合えば、良い環境の中で、勉強や部活ができると思えるようになりました。

一つ一つの出会いや時間を大切に、友達や、先輩達と協力して、一日一日をすごしたいです。

この本に出会えて本当によかったです。

佳作

『Jouange the World』を読んで

電気電子工学科 一年

柴田 真衣

私はこの本を読んで、どんな失敗をしても人

はやり直すことができるのだということを知りました。

この本では主人公Lが自分に残された二十三日間の命で世界を守ろうとしていました。ブルーシップという名のNPO法人は、実は殺人ウイルスを作り出し、人類を滅亡させようとしているテロ集団であり、その中にはLと同じワイミーズハウスという世界中から頭のかしい子を集め教育する児童養護施設出身のK、久條という人物がいました。久條は自分の両親の復讐のためにブルーシップへ入り、自爆テロをたくらんでいました。

私は久條がテロを実行しようとしたクライマックスのところでLが言った言葉にとて感動しました。その言葉は、

「人は確かに愚かです。ですが人はまた、変わることでできる生物でもあります。正義感を持った子どもたちが、その素直な心のままに大人になつてくれたら、世界は変わっていくと思いませんか。」

です。この言葉を読んだ時、そうだったんだと思えました。

私もよく考えてみれば、久條と同じ考えをもっていたのかもしれない。「悪いことをした人はもうその道から外れることはできないのだから。」と。でもこの本を読んで気づきました。私だってどんなつらいことがあっても気持ちを切り替えれば乗り越えてこれたじゃないかと。それと同じことなのじゃないかと思いま

した。

悪いことをしてしまったとしても考え方を改め、気持ちを切り替えれば、どんな人でも変わることができる。そう思ってくれる人たちがたくさんいれば世界を変えることだってできる。この本でLはそう伝えてくれたのかもしれない。

Lは考え方や気持ちという初歩的なことしか言っていない気がします。しかしそれは、誰もが忘れてしまいがちなことで、考えれば考えるほど遠くへ逃げていってしまうものなのかもしれません。それを忘れずにいること、それこそが世界を変えるということなのだと感じました。

佳作

『村田エフエンディ滞土録』を読んで

制御情報工学科 一年

浅野 早紀

この作品を読了後、私は同じ著者の書いたエッセイ「ぐるりのこと」に書かれた言葉を思い出した。「人はいつでも、『個人の生』と並行して、『時代の生』をも生きなくてはなりません。」と著者は述べていた。この作品は、民族も宗教も違う主人公たちが土^{トル}耳^コ古^コで過ごした

日々を通して、まさにその「時代の生」を生きる喜びと、悲しみを書いたものだと思う。

日本人の村田を中心にして、物語は進んでいく。村田の一人称で書かれているため、土^{トル}耳^コ古^コの街の雰囲気や文化が、外国に行ったことのない私でも分かりやすかった。村田が日本人であるという点で、物事に対する感覚が近かったのかもしれない。

彼らは毎日、一緒に食事し、議論し、雑談して笑いあっていた。それはとても微笑^{ほほえ}ましい日々で、違う文化の中で生きている彼らの考えには、よく分からなかったところもあったが、考えさせられた。特にデイミトリスの「私は人間だ。およそ人間に関わることで私に無縁な事は一つも無い」という言葉を私は忘れないだろう。この言葉を読んだとき、なんて素敵な言葉に出会えたのだろうと感動した。主人公たちに共通点はないと思っていたが、彼らは人間であるということは一緒なのだ。ただ、拾われてきて共に過ごした鸚鵡は人間ではないが、人間のように豊かな感性を持っていたと私は思う。

そして、土^{トル}耳^コ古^コでの輝く日々があったからこそ、私は終盤の悲しい出来事には打ちのめされてしまった。村田の帰国後に、亡くなっていく遠い地にいる友たち。オットーやムハンマドはそれぞれの思いを胸に、戦争によって命を絶たれた。どうしてこんなにも悲しいのだろうか。それぞれが「個人の生」を生きていたのに、大きな「時代の生」というものに飲み込まれて

いく。あまりにも「時代の生」というものは悲しいのではないかと叫びたくなった。この叫びは、最後に村田の手に渡ってきた鸚鵡の「友よ。」という叫びになったのだと思う。これはきつと読者の叫びだ。もししたら、著者も叫びたかったのかもしれない。

ただ、「時代の生」を生きていたからこそ、村田は土^{トル}耳^コ古^コに訪れることになったのだ。「個人の生」と「時代の生」を通じた様々な経験が、豊かな生き方に繋がっていくのだろう。土^{トル}耳^コ古^コでの日々が村田のこれからの人生に関わっていくのは間違いないだろうと思う。

毎日たくさん情報が耳に入ってくるが、その原因は思ったより深かったりする。そしてその度、私は「時代の生」を生きていくということを実感する。今の時代に存在するからこそ喜びと、それと同時に存在する悲しみとはがゆさが私の頭の中を駆け巡っている。でも、それが私の思いになっていくのだとこの作品を読んで思った。



佳作

『ありがとう！山のガイド犬・平治』を読んで

制御情報工学科 一年

宮近 沙 希

私は小学校の頃、よく家族で九重へ行きまして。この本は昔、九重で捨てられた「平治」という山好きの犬をガイド犬に育てあげたというお話です。

私はこの本を読み終わった後、平治はとても賢い犬だと思いました。何故かというところも山が連なっている九重の山々の登山路を一つひとつ記憶しており、言うだけで案内する事が出来るからです。その平治を育てた荏隈さんも凄い人だと思うし、沢山苦勞したことでしょう。

一番心に残っている場面は、平治が死んでしまうところです。読んでいく度に胸が締めつけられる程でした。そんな平治の活躍が書かれた「平治ノート」には、沢山の人々から、「平治と登山出来て、とても楽しかった！有り難う！」と書かれていて、平治は天国で喜んでると思います。

平治はメス犬だったので三回子どもを産みましたが、そのうちの二回は、吹雪の山の中でした。私は驚くと同時に怒りを感じました。それを一番気にしたのは荏隈さんでした。吹雪の山

の中では氷点下に達する為、子どもが凍死してしまうからです。しかし、捨て犬である平治にとっては、家で産むという事は当たり前ではなかったのです。でも平治が三回目産んだ「チビ」は今も生きており、「第二平治」と呼ばれ、平治の代わりに観光客やお年寄り、学校団体を山へ案内しています。

小学校六年生の春、私が九重に行った時に、平治の像に立ち寄りました。平治が案内した山々が深山霧島のピンク色に染まっています。像の下を見ると、沢山の花束が捧げられていました。それは平治に案内された数々の登山客の感謝の気持ちの表れだと思います。私も平治みたいに人の役に立って、人を助けてあげられる人になりたいです。

九重はこれから美しい秋になり、極寒の冬を迎えます。「第二平治」も病氣や怪我をせずに、いつまでも素晴らしい活躍をしていてほしいです。機会があったら九重に「第二平治」に会いに行きたいです。

この本を読むと、山で生き、山で死んだ平治の一生が手に取る様にわかるし、とても心が和みます。動物や自然が好きな人は読んでみるといいと思います。



佳作

『夢をかなえるゾウ』を読んで

電気電子工学科 三年

吉山 和志

自分の夢は何かという問いに即答するのは案外難しい。事実、私も具体的には答えられなかった。しかしガネーシャと出会ったことで少しずつ変わってきた。彼の得意の関西弁でのアドバイスに心を動かされたのだ。

「夢を見つけるにはな、考えとったらあかんねん。自分で触って体験して、それで初めてやりたいことかどうかを全身で判断して行くんや。」

私は義務教育であった小学校、中学校を卒業し、自分で選んだ高校へと進学した。もちろん、ある程度は自分の未来のことも意識して進む道を選んできた。しかしこれから進学したり就職したりすると考えると、まだあまり明確な未来を思い描けていない自分がいることを気付かされた。私は一体どんな仕事をしたいのだろう。そうやって悩んでいると、ガネーシャの、

「ワシはな、とんこつ味のラーメンが一番好きなんや。でもな、それは他の味を食べたからこそそう思うんや。最初にとんこつ食べてそうでもないなと思うても、その後で塩味食べたらやっぱとんこつやなって思うこともあるんや。」

つまりは経験や。経験しとるから選べるんや。でも自分ら一番大事な仕事に関してはずっと同じ味のラーメンしか食べてないやんけ。」という言葉が耳に飛び込んできた。確かに私はまだ社会人として働いたことも無いし、経験も浅い。だが逆に、まだどんな道でも選ぶチャンスが残っているという事でもあると思う。ガネーシャの言うように、もっと沢山の経験を積み、自分にしか出来ない様なことを見つけ出したいと思った。

そのために第一にするべきなのは、やらずに後悔してきたことだ。私も含め、人は中々思い切り、それにチャレンジすることが出来ない。収入が安定しないと、時間が無いとか、怖いかいという理由を付けて、ついつい実行出来ないまま先延ばしにしてしまう。これは結局、自分から逃げていることに他ならない。それではないかと思う。また、誰もが夢を叶えた自分を想像し、その姿に近付くために未来を変えようとする。でもそれも間違っている。本当に変えなければいけないのは想像の世界の中にいる自分では無く、今の自分の方だ。

「今まで無理やったらこれからも無理や。変えるんやったら今や。今、何か一歩踏み出さんと。自分のやりたいこと、何もできんまま終わってしまうで。」

というガネーシャの言葉もそれを表していると思う。夢はいつでも自分のすぐ側で道を照らしてくれているのだ。後は自分がそれに気付い

て、真剣に熱意を持って取り組むだけだ。どんなに苦しくても、自分の可能性を諦めない限り、その光が途絶えることは無い。私もいつか必ず見つかる自分の夢を信じて、真つすぐ前を見て生きていこう。

佳作

『夏の庭』を読んで

制御情報工学科 三年

河野 史織

この本の主人公の木山とその友達の下下、河辺の三人は小学六年生でしたが、山下の祖母の葬式の話から死に興味を持ち、具体的な行動に出ていきました。死についてはぼんやりと想像を巡らせるだけだった私とは大違いでした。三人は死が近そうな近所のおじいさんを観察していました。人が死ぬ瞬間が見られるまで観察するというその行動は、大人から見れば恐ろしくさえあるはずですが。しかし、死について知りたかと思つた時も何の行動もしなかった私は、三人の無神経で不謹慎な行動に驚きました。彼らを持っていたのはただ好奇心だけでした。

生きているものにとつて、死は避けたいものです。死について考えることさえ避けたがるはずですが。死を知ろうとすれば、この三人のよう

に人の死を間近で見ることになるからです。それは決して気持ちのいいものではありません。しかし、死なない命は一つとしてありません。例え周りの誰も死ななかつたとしても、自分自身の死は避けようがありません。避けるよりも、正面から向き合つて知ろうとすることが大切なのではないでしょうか。

三人が様々な体験をする中で、ふとこぼす死に対する考えを読んで、私は死というものをよく理解できていないことに気付かされました。死体は何も言わない、物体になつてしまふということ。生きている人間との違いは、息をしていないことだけではないはずだということ。死んだ人を置き去りにして生き続ける辛さ。例えば、次の瞬間に不幸な事故によって死んでしまふかも知れないと想像しても、その時まで何ができるのか、すぐには思いつかない。死んでしまえば何も出来ない。何か目標を達成することも、誰かに会つて話をすることも出来ない。でも、死ななければそれができる。様々な死のあり方を見た彼らの言葉は、同時に「生」のあり方を示しているようでした。

一度死んだだけで、人間は何も出来なくなるのです。生と死の大きな違いはそこなのだと思つて考えさせられました。逆に言えば、生きてさえいれば人は色々なことができるのです。生きている人間に囲まれて育つた私は、そのことを失念しきっていました。いろんな目標を立てて努力が出来る。いろんな人と会つて話ができ

る。いろんな事を考えることができる。生と死を比べた時、それは当たり前のことではない、特別なことなのだと思われました。

もっと色々なことをしてみたくまりました。この物語の三人のような貴重な体験はできなくても、生きているからこそ出来る何かをしてみたいと思いました。

佳作

『ベルナのしっぽ』を読んで

都市システム工学科 三年

古木 亜弥実

私は、毎日ごく普通に過ごしています。平凡に友達と遊んだり、テレビを見たり、そんな日々の繰り返しです。

そんなある日、私が電車に乗った時に向かいの席に杖を持った人が座りました。でも、見た感じはかなり若い人です。その人は、目に障害のある人でした。電車を降りる時は杖を器用に使ってスムーズに降りていました。

私は、すごいなあと思ったのと同時に、目の不自由な人は電車やバスや喫茶店など人の多い場所ではどうしているんだろうと疑問にも思いました。

その中でも、一番気になったのは盲導犬で

す。私は、犬が好きだけでもちろん苦手な人もいます。盲導犬と一緒に生活をしている人はどうしているんだろうと思いい、「ベルナのしっぽ」を読むことにしました。

この本の作者で、主人公でもある郡司さんは、最初は犬が苦手で、一緒に生活できるまでつらい訓練が続きました。犬に限らず苦手な物を克服するのは中々できる事ではないと思います。私は、どちらかというと苦手な物は克服しようとせずに避けてしまう方なので、郡司さんは強い人だなあと思いました。

それから、私が驚かされたのは子育てです。郡司さんは結婚しているのですが、旦那さんの目も不自由です。二人共、目が見えないのにベルナと一緒に協力しあって立派に育てていきます。でも、特に驚いたのは息子の幹太君です。目の不自由な両親をきちんと支えて本当にすごいなと思いました。ベルナとも、姉弟のように仲良しです。

そして、郡司さんは長い間ベルナと過ごしますが、ベルナは病気になるってしまいます。だんだん目が見えなくなってしまうのです。目の不自由な人を誘導する盲導犬にとって、目が見えなくなる事は、もう主人と過ごせなくなるという事です。治る見込みもありませんでした。ベルナは一生懸命病氣と戦った末、亡くなってしまうのですが、最期まで郡司さんを支えていました。

この本を読んで、動物との絆ってすごいなあ

と感じました。動物は怖がっていると心を開いてくれないと聞いた事がありますが、本当にその通りだと思います。そして、これは人と人との間でも同じです。私は、これから出会っていく人と心を開いて過ごせたらいいなと思います。



編集後記

学生図書委員長（制御情報工学科五年）

鈴木 克也

学校の先生や周りの大人に、「本を読め！」と言われたことはありませんか。たぶん、一度は言われたことがあるでしょう。本を読むことが大切だと言われるのは、そこから色々な知識が得られるからだとよく言われます。実際、これまで本から多くの知識を得られたという人もいないではないでしょうか。本を読むことはとても大切なことです。ぜひ、本を読んでください。

さて、今年もみなさんが書いた読書感想文の審査が行われました。今回選考にかけられたのは22作品で、昨年の13作品をはるかに上回る数字ですから、それだけ今年は優秀な作品が多かったということになります。

それでは、独断による審査の感想を述べさせていただきます。全体的に見て、自分の状況に照らして考えている人が多かったように思います。「こういう態度を見習いたい」とか、「主人公のこういう考え方をしていきたい」というように、客観的に自分を見ている作品がいくつかありました。その中でも特に素晴らしいと思える作品がありました。いくつか例をあげると、あらすじを簡潔に紹介してじっくりと自分の考

えを熟考している、非常にまとまりのよい作品がありましたし、冒頭で全体の感想を簡単に述べて後から具体的に自分の考えをじっくりと書いている作品もありました。

22作品もあったので、入選にあと一歩及ばなかった作品も多くあります。審査を行った図書委員の1人が話していたことですが、文法上の間違いや文体がおかしいと思われる作品があり、残念ながら内容とは関係のないところで減点されたケースもいくつかありました。それでも、伝えたいことがはっきりと書かれている作品や内容がまとまっている作品も多くありました。ですから、今回入選できなかったからといって諦めたりしないで、次回は入選を目指して頑張ってくれたらと思います。4、5年生も忙しいとは思いますが、積極的な自主投稿をお待ちしています。

読書感想文とは、自分が本を読んで感じたことと得られたことについて、文章を使って表現するものです。しかし文章以外の方法で、自分の感想を表現する機会があります。二〇〇九年一月二十一日水曜日に行われる読書会は、自分の考えや意見について語らう場です。他の人の意見や感想に触れることのできる数少ない機会でもあります。興味のある方の参加を、お待ちしております。



「まや」 第三十六号

発行日 平成二十一年一月八日

発行者 大分市牧一六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

印刷所 株式会社明文堂印刷
住所 大分市長浜町一丁目二一二
電話 〇九七―五三三―八八〇〇